
語学教育のDXと学びの創出： 大学教育学会第44回大会に参加して

菊地 恵太

今般、6月4日(土)から5日(日)に渡って岡山理科大学で開催された大学教育学会第44回大会に参加し、withコロナの今後の大学語学教育に対しての多くの学びを得る機会を頂いた。本稿では、「大学教育のDX テクノロジーがもたらす大学教育のイノベーション」という題目で開催された本学会で私が学んだことを語学教育への応用に関する私見を交えて、本稿で皆様と共有をしたい。

さて、個人的にも国内学会出張をするのは2019年8月以来であり、岡山駅からすし詰め会場行きのバスに揺られ、多くの参加者が研究発表の時間に合わせ早足で移動する光景の中に自分がいることに懐かしさのような不思議な感覚を覚えたほどである。会場となっていた加計学園経営の岡山理科大学は岡山大学の奥の山の中にあり、最寄りのバス停からもさらに数本のエスカレーターでさらに5分以上かけてキャンパスにたどり着いた。まずはこういった経験を通して、ここ数年でDX(デジタルフォーメーション)の恩恵で自宅にしながらにしてクリック何回かで学会参加するようになった「新しい日常」との違いを大きく感じる事となった。

ハイブリッド形式で開催された学会の基調講演は、東京の自宅のスタジオからと思われる場所からzoomを使ってリアル配信された落合陽一氏の「魔法の世紀」の大学教育ビジョンと題されたものであった。筑波大学准教授でデジタルネイチャー開発センター長も務めており、メディア



学会会場から岡山市内を望む

アーティストを名乗る氏が独り言のように話す様子を基調講演として拝聴したわけである。1時間ほどの講演を視聴しながら、Youtubeなどの短い動画配信に慣れた学生たちが、大学教員の長々とした講義をオンラインで1日中間き続けなければいけなかったオンライン授業に対しての気持ちが少し理解できたなと思った。この基調講演ではDXの潮流の中での自分の経験も踏まえた彼の考えや意見を聞いたり、幾つかの彼の制作物の紹介を見ることができた。心に響く基調講演を聞けたというよりは、まるでテレビ番組を見ているような感覚を覚えた。これもデジタルフォーメーションの中で従来の学会のスタイルが変わってきたおかげと痛感することになったわけである。

学会では、「コロナ禍が学生の学びと成長に与えた影響」「大学生の学習・生活実態調査結果報告」などといった発表を聞く機会もあり、「DXは大学

教育にどのようなイノベーションをもたらすのか」と題されたシンポジウムにも参加した。今回この大学教育学会に初めて参加したのだが、特筆すべきは学会での発表者がベネッセ教育総合研究所といった企業のメンバーと大学教員、あるいは大学職員と様々な立場の方々に及んでいるということである。教員と職員、また外部企業との連携で行われる、いわば学際的で開かれた大学教育に関する研究の姿を垣間見れた気がした。

さて、今回のそういった様々なスタイルの研究報告やシンポジウムで個人的に興味深かったのは、京都大学や早稲田大学の職員の方々が登壇されお話になったご自身所属の大学でコロナ禍においてどのように教員や学生を支えながら教育のDX化に奮闘されたかに関するパネルディスカッションだ。本学でもベネッセによる調査に基づいた報告を教授会等で聞くことがあるが、図やグラフを用いた調査報告を短時間で毎年のように聞くばかりである。今回のシンポジウムからはベネッセのような企業によって行われた調査を生かし、職員と教員が連携してどのように大学改革を進めていけるのかといった方向性のヒントを得られたと感じた。

本稿の最後に語学教育のDXに関して今回の学会での学びに基づき、私見を述べたい。歴史を振り返ると人類は様々な困難を克服し、進化を進めてきたといえよう。今回の新型コロナウイルス感染症の拡大と人類の戦いはまだ終わったとはいえない。ここ1年ほどで対面中心の教育に語学授業も戻ってきたが、コロナ禍でのDXの結果、事前課題や事後課題を受講者に問うことは容易になった。対面でしかできないことは100分の授業内で行い、オンラインでもできることは自宅課題へ移行すること

でさらなる学習時間の確保を望めるようになった。

ただ一方でここ1年ほどで感じているのは様々な社会活動が活発になってきたことに伴い、学生のバイト時間も増大してきており、学習時間の確保がまた難しくなってきたことだ。事前課題を求めても平気でそれを無視し、教科書を購入せずに他の学生から入手したすでに答えの書いてある教科書を見せ、事前課題をやったように教員に見せる学生を目の前にすると啞然とせざるをえない。想像したくはないが、課題の提出をオンライン上で求めてもそういった学生は他の友人がやったものをただコピーし、ファイル提出するかもしれないし、デジタルであろうと紙媒体であろうと彼らはただ単位を落とさない程度に学びをしていることを装うだけであろう。

本稿では、大学教育での学びの創出に関して、教員、職員、そして外部企業など様々な立場の人々の連携により可能になることを述べてきた。一方で大学生たち自身が学びたいと思う意欲はDXの助けを借りても本人たちには結局生み出せないものである。“You can lead a horse to water, but you cannot make him drink.”とよく聞かすが、残念ながらDXをもってしても学びをする主体である学生たちを変えることは難しいであろう。語学教育のDXがもたらす様々な恩恵に感謝して、学びをより進めたいという学生たちは私たちの大学にも多くいる。彼らの多くの輝く瞳を見ながら対面授業に携わる日々がやっと戻ってきた。今回の学会で得た知見を活かし、そういった学生たちの役に立てるDXを活用した授業実践に邁進しよう今回強く感じることとなった。